

## 三枚の写真

「はい。ポーズ。」

「おっ。なかなかいい写真だよ。帰ったらすぐ家のパソコンに保存しよう。」

けんじは東京から遊びに来たいとこのたかしといっしょに、二人で竹原町並み保存地区に住んでいるおばあちゃんの家に行くとしゅうだ。せっかくなので、古い家の前で観光客の人に頼んで記念写真をとってもらった。おばあちゃんの家はもうすぐだが、たかしが町並みを見たいと言うのでちょっと遠回りをしている。

「へーっ。これが<sup>(1)</sup>頼山陽<sup>らいさんよう</sup>のおじいさんの家か。白いかべがまぶしいねえ。」

たかしは、あちこちをきよろきよろとながめながら歩いている。けれどもけんじにとっては何度も通った見慣れた町並みである。早くおばあちゃんの家に行きたくてたまらない。おまけに<sup>(2)</sup>胡堂<sup>こどう</sup>から引き返すころには急に黒い雲が空をおおってきた。

「ねえ。たかしにいちちゃん。早く行こうよ。雨もふりそうだよ。」

「まてよけんじ。せっかくだから町並み保存センターにもよっていかないか。」

ポツ ポツ ザザーッ どしや降りの雨がふりはじめた。

「だから言ったじゃない。にいちちゃん。」

けんじたちは走り出したが、あまりにもひどい雨なので、さつき写真をとった古い家のなかに入り込んだ。ここは観光客が自由に入ってもいい家だ。二人は少しうすぐらい部屋の中にゆっくりと入っていた。障子の向こうに見える中庭が雨にぬれている。意外に雨の音がかすかにしか響いてこない。ふたりのたたみをふみしめる音だけが聞こえてくる。床の間にはりっぱな掛け軸がかざってある。

「なんか。すごいね。テレビで見たお侍さんがでる昔にタイムスリップしたみたい。」

「あたりまえだよ。けんじ。そのころにつくられた建物なんだから。」

「ふーん。長持ちするんだね。」

「何もしないで、そのまま残っているわけじゃないだろ。この何百年も前から続く町並みは国が守るよ  
うに指定して、竹原の町のみんながずっと大切に守ってきたんだろ。なあ。けんじ。」

「えっ。そうなの。よくわかんないや。東京にいるたかしにいちちゃんの方がぼくよりもこの町のことを  
知っているみたいだね。」

その時、天井の方から何か音がしてきた。二階にだれかいるようだ。気になって、急なかいだんをお  
そるおそるあがっていった。思ったより二階は広い。天井には立派な太い梁<sup>はり</sup>が何本も通っている。どの  
柱を見ても時の流れの長さを感じる。大きく広いあめ色の板の間にひとりの男の人がすわっていた。な  
ぜかそこには琴<sup>こと</sup>がおかれている。

「おじさん。何してるんですか。」

「さつきまで。ここで今度開く予定の演奏会の準備をしていたんだよ。」

「演奏会？なんでわざわざこんな場所でするんですか。」

おじさんはにっこりと笑ってそのわけを話しはじめた。

「どうだい、見てごらん。あの天井やこの床を。長い年月をかけたからこそ出てきた美しさがあるだろ  
う。この場所での演奏会。とてもすてきな時間だよ。でも、もしかしたら、この家はずっとだれの目  
にもふれられずにこわされていたかもしれないんだよ。」

いつのまにか二人はおじさんの話にひきこまれていた。



「この家は、前は人がだれも住んでいなくて、放置されたままだったんだよ。それをわたしたちが持ち主の方と話し合って自主的に直していったんだ。他にも何軒かだれも住んでいない家を直して、今はおみやげ屋になったりしている所もあるよ。」

「何でそんなことまでするの。」

「何でって。長い歴史をもつ竹原の町並み。ここはわたしの町なんだよ。きみはどこから来たの。」

「おにいちちゃんは東京から。ぼくは、竹原に住んでいます。」

「そうかい。だったらきみの町じゃないか。」

「ふーん。ぼくの町か・・・。」

気がつけば、雨がやんでいる。二人はおじさんにお礼をいっておばあちゃんの家に向かった。

「ねえ。この写真。見てみて。かっこいいでしょ。」

おばあちゃんの家につくとさっきおじさんに出会った家で写した写真を、おばあちゃんに見せた。すると、おばあちゃんはやっとびっくりしたように言った。

「おや。これはいい写真。ちよつと待ってみ。ええもん見せちやる。」

おばあちゃんはこのしなながら席をたって、別の部屋に入り、すぐにもどってきた。手には古ぼけた二枚の写真があった。まず古いカラー写真を見せてくれた。

「これがたかしのおとうさん。これがけんじのおとうさん。」

「うわあ。これ今日ぼくたちが入った家だよ。同じ場所で、ほとんど同じポーズだよ。」

「この二人ががんばでの。よくこのへんでいたずらして、おこられていたんじゃないよ。」

おばあちゃんはまだ一枚写真をとりだした。

「これは、わたしのおじいちゃんの写真。もうずいぶん昔の写真じゃよ。」

「うわあ。これも同じ場所。町並みも変わっていないよ。」

「そうじゃよ。この町並みはずっと変わっておらん。いや変わらんように多くの人に守られてきた。思い出がいっぱいあった建物や道、お寺、すべてが残っているおばあちゃんの大好きな町じゃよ。」

けんじは三枚の写真をじっと見つめていた。おとうさんやおじさんの小さかった頃。出会ったこともない、おばあちゃんのおじいちゃんの声が聞こえてくる気がした。急に竹原の町並みがまた見たくなってきた。

けんじはたかしと竹原の町が見わたせる<sup>(3)</sup>普明閣<sup>ふめいかく</sup>にかけのぼっていった。

真下には竹原町並み保存地区の家々の屋根が並んでいる。その向こうには竹原の町が広がっている。けんじの家もかすかに見える。おじさんの顔がうかんできた。

「ここは、ぼくの町。」

けんじは大きく息をすってゆっくりと町並みを見渡した。雨上がりの町はいつもとよりも輝いて見えた。



#### 【注】

- (1) 江戸時代の儒者。「日本外史」編。その祖父頼惟清の家は一七七五年頃の建築。県史跡。
- (2) 建築年代は江戸中期といわれる。竹原の町並み通りのつきあたりに位置する。
- (3) 一七五八年京都の清水寺の舞台を模して造られた。竹原の町が一望できる。市重要文化財。